

18. 焼山の溶岩流と眉山の崩壊

地 域	島原市焼山－眉山－白土湖
交 通	島原鉄道 島原駅下車
地形図	島原（1 / 50,000）

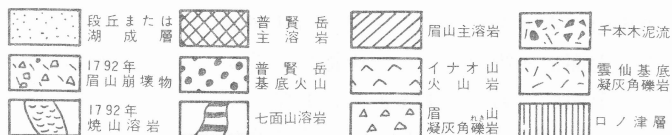
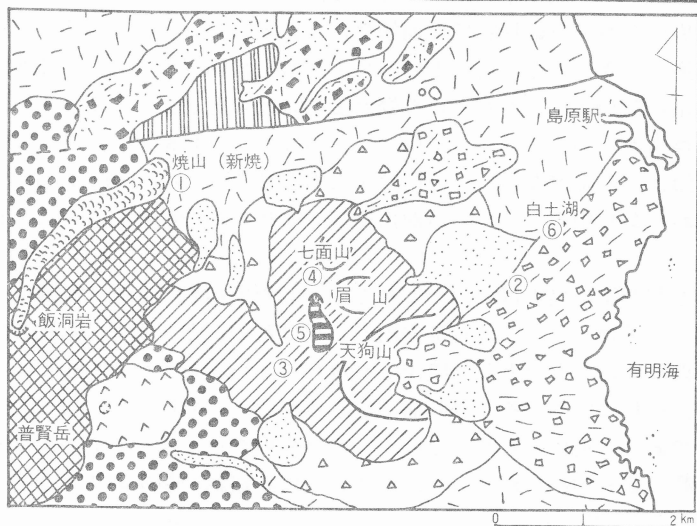
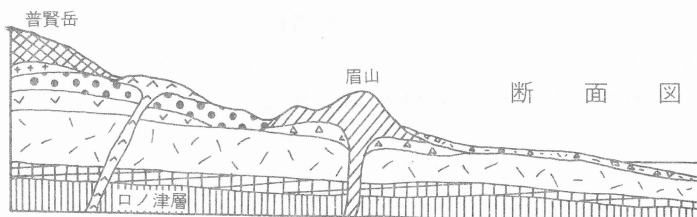
三角帽子のような眉山が車窓から見え始めると松平七万石の城下町である島原市も近い。島原駅に立つと五層の天主閣を持った白亜の島原城とその後にそびえた素朴で黒々とした眉山が眼にはいる。

この島原市の西の方に「焼山」と呼ばれて市民に親しまれている景勝の地①がある。夏は「そうめん流し」で涼しさを楽しむ家族づれで賑う所である。駅から約5kmはあるが日に数本のバスの便もある。ここ焼山は大小の岩が重なり合って高い崖をつくっている。岩の間には枝振りの良い松が生え、岩と松はみごとに調和しすがすがしい庭園となって、何とも楽しい岩山である。

この岩山は今でこそ静かな庭園の相をしているが、江戸時代寛政4年（1792年）には地下から流出した灼熱の溶岩の流れた所であった。この溶岩流は普賢岳火山の最後の活動の時期に流出したもので、いわゆる雲仙火山の最も新しい、しかもはっきりとした火山活動である。（新焼溶岩）

溶岩は地震と地鳴を伴い普賢岳の北腹の飯洞岩（940m）の北の穴より噴出して普賢岳基底溶岩と普賢岳溶岩の間にできている穴迫谷という谷を流れ下り千本木へと約3kmつづいた溶岩流となった。この溶岩流は1日に約28mの速さでゆっくりと流れ下ったという。

この溶岩は含しそ輝石黒雲母角せん石安山岩であり、溶岩としては粘性の高いほうである。石基は黒く岩石全体は黒く見える。斜長石の白い斑晶が特徴的である。またこの岩石は雲仙火山の岩石の



眉山周辺の地質図 (千藤他による)

中でも最もガラス質のものである。顕微鏡下では斜長石のアルバイト双晶、カルスバット双晶が普通に見られ、不透明鉱物として磁鉄鉱が多く含まれている。

江戸時代の溶岩流「焼山」を後にしてすぐ眼前に高くそびえた眉山に向う。この眉山は「崩れゆく眉山」として日本であまりにも有

名な山である。眉山は東の方の崩壊が特にはげしい。崩壊のつづいている大きい沢は七つもあり、今も少しの雨や地震などでも音をたてて崩れている。そこで島原火山観測所②はこの崩壊や地震の観測を常時行なって眉山を監視している。また眉山のふもとは「崩山」「新山」などの町名もある。この崩壊のつづいている眉山の東斜面は危険なため登山禁止になっている。

眉山の西の方は現在では崩壊はほとんどなく、眉山の頂上まで登山道もできている。眉山といっても北の七面山（818m）と南の天狗山（712m）に分かれていて登れるのは北の七面山である。

焼山から約40分ぐらいで眉山の西の登り口③に着くが、そこまで露頭はほとんどない。この山は少し離れてみると45～70°ぐらいの山ぎわをなし相当にけわしいが山道は雑木林の中を蛇行し危いことはない。

七面山④は黒雲母・角せん石を主とした安山岩でかなり酸性岩に近く、場合によっては石英安山岩と呼ばれるほどである。眉山は雲仙火山の寄生火山として噴出した流れにくい溶岩でできた山であるが、それに加えてその後の崩壊によってさらに急峻な山になったようである。灰色の石基に白い斜長石と黒い雲母と角せん石の大きな斑晶（5～10mm）がばらまかれていて斑状組織の見本のような岩石である。

この眉山の本体をなしている黒雲母角せん石安山岩を貫いて噴出した、七面山南側溶岩（七面山溶岩）⑤が7～8合目付近から見られる。七面山溶岩は、あるものは非常にガラス質であって黒く、あるものは流理が発達していて前述の黒雲母角せん石安山岩とは簡単に見分けられる。検鏡では普通輝石としそ輝石を含む角せん石安山岩であり石基は斜長石・輝石・角せん石・磁鉄鉱より構成されている。

雑木林の急な細い道を登りつめると社のある七面山の頂上である。

東が広く開けている。眼下には有明海を前にして広い田園に囲まれた城下町島原がのんびりと広がっている。寛政4年の眉山の大崩

壊でできた、下の海上に浮んだ、九十九（つくも）島が美しい。また海のむこうには雲仙や多良岳と同系統（山陰系火山）の熊本県の金峰山が淡くかすんで見える。

島原市は危険な眉山をかかえているが、市民はこの眉山に「ふるさとの山」として親しみを覚えているようである。このような親しみを長い間に育てた静かな流れは、あるいは恵まれた地下水ではないだろうか。

島原市は豊富な澄んだ「水の町」である。澄んだ豊富な水は伏流水として眉山の崩壊堆積物の中から湧き出している。水は新しく破壊された岩石の泥質が極めて少ない層中をとおるため非常に澄んでいる。この湧水を見るには白土湖⑥へ行くと良い。ボートの浮いたかわいらしい白土湖は日本最小で最新（1792）の陥没湖といわれる。白土湖は流れ込む川は無く、流れ出る川だけである。湖水の底には湧水の口が何ヶ所も有ると思われるが水面からは見られない。白土湖の北端の道路わきに3ヶ所の湧水があり地元の人は上水として利用し水神様を祭っている。年間を通して水温15℃で夏冷たく、冬温かい、止まることを知らない恵まれた湧水である。このような湧水はここだけでなく島原市の各所に見られけっしてめずらしくはない。（西村晒希）



崩れゆく眉山